

課題名 ラーニング・コモンズに注目したコンピテンシー・ベースト・カリキュラムの開発研究

研究代表者名 清水 禎文 (教育設計評価講座)

研究組織等 田中 光晴 (アジア共同学位開発プロジェクト)
山崎 直也 (国際教養大学 国際教養学部)
杉本 和弘 (東北大学高等教育開発推進センター)

研究目的

近年の高等教育改革において、コンピテンシーモデルによるカリキュラム編成が提起されている。この「21世紀型カリキュラム」の中心概念であるコンピテンシーに関する議論は多様に展開されているが、学習環境を視野に入れた研究は少ない。

中教審答申では、大学教育は「従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要」とされている。これに伴い、アクティブ・ラーニングのための場所として、図書館の機能が見直され、そのためのスペースを整備する動きが広まりつつある。一方、このスペースの用意・確保とともに、そのスペースをいかに活かしていくか、さらに従来のカリキュラムやコンピテンシーとどう関連付けていくかについては検討の余地がある。

そこで、本研究では、国内の大学における①学習環境としてのラーニング・コモンズの設置状況を分析し、それらを各大学が設定するコンピテンシーとどう関連付けているかを調査する。それらの結果を踏まえ、カリキュラムを広く学習環境までを含む概念として捉えたコンピテンシー・ベースト・カリキュラムの開発を目指したい。

支援期間では上記の課題にアプローチすべく2つの作業課題を行なった、まず、文部科学省による大学改革事業（特色 GP、現代 GP、グローバル人材、G30 など）におけるラーニング・コモンズを取り巻く状況と各プログラムで設定されているキー・コンピテンシーを調査した。

第2にラーニング・コモンズを積極的に展開している事例として国際教養大学を選定し、ヒアリング調査を行なった。研究期間、研究資金の制約から、本年は海外との比較分析まではいたらず、情報収集・整理にとどまった。したがって、以下では主に国内の状況について報告する。

研究経過

(1) 文部科学省による大学改革事業のデータ整理と分析

財団法人文教協会によって公開されているデータベース¹を活用し情報を収集・整理を行なった。データ収集の対象としたのは、〈表1〉の通り、全1740プログラムである。これらのデータを

対象に①ラーニング・コモنزを含む学習環境に関する記述、②コンピテンシー（○○スキル、○○力など）に関する記述を抽出した。

その結果、学習環境に関する記述は41件であった。ラーニング・コモنزと明確に記述され

〈表1〉平成15～24年度文科省支援プログラムにおけるLC記載プログラム

年度	支援プログラム名	件数	LC
15年度	特色ある大学教育支援プログラム	80	3
16年度	特色ある大学教育支援プログラム	58	0
	現代的教育ニーズ取組支援プログラム	86	5
17年度	特色ある大学教育支援プログラム	47	0
	現代的教育ニーズ取組支援プログラム	84	3
18年度	特色ある大学教育支援プログラム	48	0
	現代的教育ニーズ取組支援プログラム	112	3
19年度	特色ある大学教育支援プログラム	52	4
	現代的教育ニーズ取組支援プログラム	119	0
	新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム	70	3
20年度	質の高い大学教育推進プログラム	148	2
	新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム	23	0
21年度	大学教育・学生支援推進事業(学生支援推進プログラム)	400	1
	大学教育・学生支援推進事業(大学教育推進プログラム)	96	7
	国際化拠点整備事業(グローバル30)	13	3
22年度	大学教育・学生支援推進事業	26	1
	大学生の就業力育成支援事業	181	1
23年度	大学の世界展開力強化事業	25	0
	博士課程教育リーディングプログラム	20	0
24年度	グローバル人材育成推進事業	42	5
	産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業	10	0
		1740	41

出典:文教協会データベース<http://www.bunkyokeyokai.or.jp/gp/>より集計後筆者作成

たプログラムはわずかで、ほとんどが学習支援センターや学生サポートセンターといった学習支援サービスに特化したものであった。

コンピテンシーに関する記述で目立つのは、コミュニケーション能力・スキル(288件)、人間力(103件)、社会性(67件)、主体性(51件)、創造力(39件)、チームワーク(38件)、行動力(38件)、語学力(25件)、問題解決力(25件)、考える力(18件)、実行力(17件)、生きる力(17件)などであった。これらはいずれも社会人基礎力として経済産業省が提唱している力である。しかしこれらのコンピテンシーと学習環境が関連して記述されている箇所はなく、コンピテンシーと学習環境が連動する形で計画設計されているものはなかった。

上記のように大学改革事業ではラーニング・コモنزの設置事業が見えてこなかった。したがって、本研究では全国の大学779校のホームページを対象に、ラーニング・コモنزの設置状況を調査した。その結果、設置済みが149大学、計画が50大学、記述なし・不明580大学であった。設置場所については、図書館が最も多く(117件)、次いで新設スペース(教室6件、その他26件)であった。尚、図書館を対象に行なっている「学術基盤実態調査」では、平成24年度から「アクティブ・ラーニング・スペース(複数の学生

が集まって、様々な情報資源を用いて学習を進めることができるスペース)」を調査対象に加えている。その結果、平成 24 年 5 月 1 日現在では 226 館の図書館でアクティブ・ラーニング・スペースが設置されており、この 3 年間で 2 倍となっていることが明らかになっている²。

以上のことから、日本においては図書館を中心にラーニング・コモンズの設置が進められてきたことが分かった。学習環境としてラーニング・コモンズを位置づけているものの、図書館に設置されるケースが多いため、授業での活用が難しく、カリキュラムや授業実践と連動する形での活用が進んでいないと推察される。

(2) 事例研究

本研究では全学的に学習環境を整備し、カリキュラムに積極的に位置づけようという事例を取り上げ、施設見学と学生へのヒアリングを行なった。

研究協力者の山崎直也准教授にコーディネートしていただき、2014 年 1 月 30 日に英語での授業見学を行ない、学生 3 名へのヒアリングと施設見学を行なった。

国際教養大学は、国際的に活躍できる人材を育成する世界水準の大学をめざし、「授業はすべて英語で行なう」「少人数での議論中心の教育システム」「新入生は外国人留学生とともに 1 年間の寮生活」「在学中に全員 1 年間の海外留学を義務付ける」「24 時間オープンな図書館での学習・研究環境の提供」などユニークな教育方針を掲げる公立大学である。

インタビューは、半構造化インタビュー法を用い、2014 年 1 月 30 日（木）の 14:00～1 時間半程度、学生 3 名に対し懇談会形式で行なわれた³。以下では①学生寮での生活、②学習施設の利用、③身についたスキル・コンピテンシー、について紹介する。

① 学生寮での生活

国際教養大学では、入学から 1 年間キャンパス内にある寮（こまち寮）での生活が義務づけられている。入居後最低半年は留学生との共同生活をする事になっている。寮はキャンパスの中心に位置している。1 年生の間は、朝食を 7 時から 8 時半の間にとり、9 時から授業が始まり、昼食に寮の食堂（学生食堂と同じ）に戻り、午後の授業を受け、18 時頃夕食を寮の食堂でとる。その後課題やミーティングなどがあれば大学の図書館やコミュニティスペースを利用する日々で、まさにキャンパスに住んでいるという印象を受けた。

こまち寮には、1 年間の寮生活をサポートするレジデント・アシスタント（RA）が共に住みながらサポートしているが、特定の教育プログラムなどが準備されているわけではなく、学生主体のサークルや留学生との交流イベントなどが開催される。

アメリカ人と 1 年間生活した A さんは、日常的に英語でコミュニケーションをとり、大学生活もほぼ一緒に生活したという。一方で、留学生との共同生活では衝突することも多いという。B さんは、台湾からの留学生と半年間共同生活するなかで、生活習慣の違いを

感じたという。ただ、そういった衝突を含んでも留学生との生活が学習面でも異文化理解の面でもよい刺激となったという点では共通していた。

学内には初年次の寮以外にも学生宿舎として、ユニバーシティヴィレッジ、グローバルヴィレッジ、さくらヴィレッジが敷地内に準備されており、退寮後も大学周辺に住むことができ、多くの学生がこれを利用している。

② 学習施設の利用

1年時はほぼ寮を中心に生活するようであるが、2年生以降徐々に行動は集団生活から個人へとシフトする。学習施設の利用については図書館や言語異文化学習センター（LDIC）を中心に、学内のカフェやロビーなどの空間の利用が多いという。図書館（蔵書量約7万冊）は24時間利用可能（カウンターサービスは8:45～22:00、長期休業は18:00まで）で、22時頃から図書館は混みだすという。



〈写真1〉LDICのオープンスペース

LDICは、外国語を学ぶ人の自律学習支援スペースで、オープンスペースの他、学習用個室、グループ学習室などの利用が可能である。LDICには学生スタッフがおり、利用案内をはじめ言語の学習サポートを行なっている。

国際教養大学では、カリキュラムと学習支援システムの融合が特に入学後から始まる英語教育集中プログラム（English for Academic Purposes : EAP）で部分的に機能している。EAP学生は、授業の一部としてLDICでの「自主言語学習」が義務づけられており（タイムカードで時間管理される）、それが単位取得の条件になっている。それ以外にも国際教養大学での授業はグループワークが多く用いられているため、授業外に学生同士がミーティングを行なうことが多く、学習施設の利用頻度が上がるという。

Cさんは、モロッコでの留学経験で、図書館に行く習慣が身につき、帰国後からLDICや図書館を積極的に利用するようになったという。図書館やLDICにあるグループ学習室はグルー



〈写真2〉図書館のグループ学習室

プワークでのミーティングやサークルの打ち合わせ、留学生との勉強会などで3人とも使用経験があった。ホワイトボードなどがあることや部屋の予約がオンラインでできることなど部屋の活用のしやすさが魅力のようである。

③身についたスキル・コンピテンシー

Aさんは、大学院進学を目指していることもあり、専門的知識を深くしたいという思いがあった。「教授との関係性が近い」と大学を評価している一方で、より深い専門知識を学ぶには教養大では限界があることを指摘している。

Bさんは、英語にコンプレックスをもっていたが、台湾留学を通して、使う言語ではなく何を語るかが重要であるということに気づいたという。

Cさんは、教養大での生活と留学を通して身についた力として、決断力を挙げている。彼女は大阪から秋田へ、秋田からモロッコへと環境の変化の中でそれぞれの風土や文化を比較する視野を獲得し、徐々に自分から決めて行動することができるようになったと振り返っていた。

成果と今後の展望

研究は緒についたばかりであるが、成果と今後の課題についてまとめておく。

学習を安定した形で進めていくためには、学生の生活環境が整っているということが大切である。例えば新しいプログラムを作るときには、どういう科目を提供するのかということばかりに集中しがちになり（狭義のカリキュラム）、実際に学生が学習するための環境を含めた広義のカリキュラム設計がなされることは少ない。近年進められている大学改革の中でもラーニング・コモンズやコンピテンシーなどのワードは注目されているものの、本研究の調査では一体型の整備はほとんど想定されておらず、学習環境の整備も進んでいないことが明らかになった。今一度カリキュラムや授業実践なども含めた環境設計への転換が必要であろう。

今後は、海外の事例にも目を配りながら、図書館や教室あるいは寮などの空間をどうカリキュラムに位置づけ、獲得させたいコンピテンシーを学習環境といかに連動させるか考えていく必要がある。また学習環境を通して、学生同士、先輩後輩、さらには教員と学生、事務職員などとの人間関係を作りこんでいくという可能性も模索してみたい。その作業を通して、学習環境や人間関係が学びの質にいかに関わるか追究していきたい。

謝辞

本論文の執筆にあたって国際教養大学の堀井里子先生、佐藤裕先生に調査協力いただいた。また資料収集、整理などで東北大学大学院の大久保哲平さんに協力いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

【注】

1 公益財団法人文教協会 大学教育改革プログラム選定取組一覧 DB

<http://www.bunkyoikai.or.jp/gp/> (2014年1月アクセス)

2 文部科学省平成24年度「学術情報基盤実態調査」の結果報告について

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/03/1332269.htm (2014年1月アクセス)
政府統計の総合窓口 学術情報基盤実態調査

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001015878> (2014年1月アクセス)

3 調査協力学生について

- Aさん(男性・23歳)**、グローバル・ビジネス学科4年生、山形県出身。進学校から2010年に入学。高校2年生の時にケベックに留学経験がある。カナダのトロント大に留学を希望していたが、姉の留学と時期が重なったため、財政的に困難になり、トロント大と協定を結んでいた国際教養大に入学した。サークルはかつて旅行を企画するイベントに入っていたが、現在は入っておらず、塾講師のアルバイトをしている。留学は大学3年生の時にカナダのトロント大学に1年行き、経済学を専攻した。現在大学院への進学を希望している。研究職志望。
- Bさん(女性・21歳)**、グローバル・スタディ学科3年生、熊本県出身。進学校から2011年入学。高校2年生まで他校進学を考えていたが、テレビで国際教養大の特集を見て、他人と同じような大学生活を送らずに済むと考え進学を決めた。サークルは、野球部マネージャーとダンス部と日本台湾学生会議に入っている。アルバイトはしていない。3年生の時に国立台湾大学に1年間留学した。台湾のことについて学んだ。4年生から休学し、カナダにワーキングホリデーで渡航予定。一般就職希望。
- Cさん(女性・21歳)**、グローバル・スタディ学科3年生、大阪府出身。進学校から2011年入学。高校2年生の時にカナダに1年間留学経験があり、英語を忘れたくないということと、自分を追い込む環境が必要だと考え進学を決めた。サークルは学生主体で季節に応じたイベントを企画するイベント委員会に入っている。3年時にモロッコのアルアッファイン大学に1年間留学し、国際開発について学んだ。卒業後は開発学系の大学院進学を考えている。発展途上国に関連する職に就く希望がある。

【参考文献】

- 奥田雄一郎(2012)「心理学からみた我が国のラーニング・コモンズにおける学びの動向と今後の課題」、『共愛学園前橋国際大学論集』12号、91-103頁。
- 加藤信哉・小山憲司編訳(2012)『ラーニング・コモンズ-大学図書館の新しい形』勁草書房。
- 佐藤翔(2008)「学びの場の新しいカタチ」と「新しい学びのカタチ」-第18回大図研オープンカレッジ参加報告、『大学の図書館』27号、162-163頁。
- 茂出木理子(2008)、「ラーニング・コモンズの可能性：魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学へのチャレンジ」『情報の科学と技術』Vol.58、No.7、341-346頁。
- 米澤誠(2006)「動向レビュー：インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学修支援」『カレントアウェアネス』no.289、9-12頁。
- 公益財団法人文教協会 <http://www.bunkyoakyokai.or.jp/>
文部科学省平成24年度「学術情報基盤実態調査」の結果報告について
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/03/1332269.htm